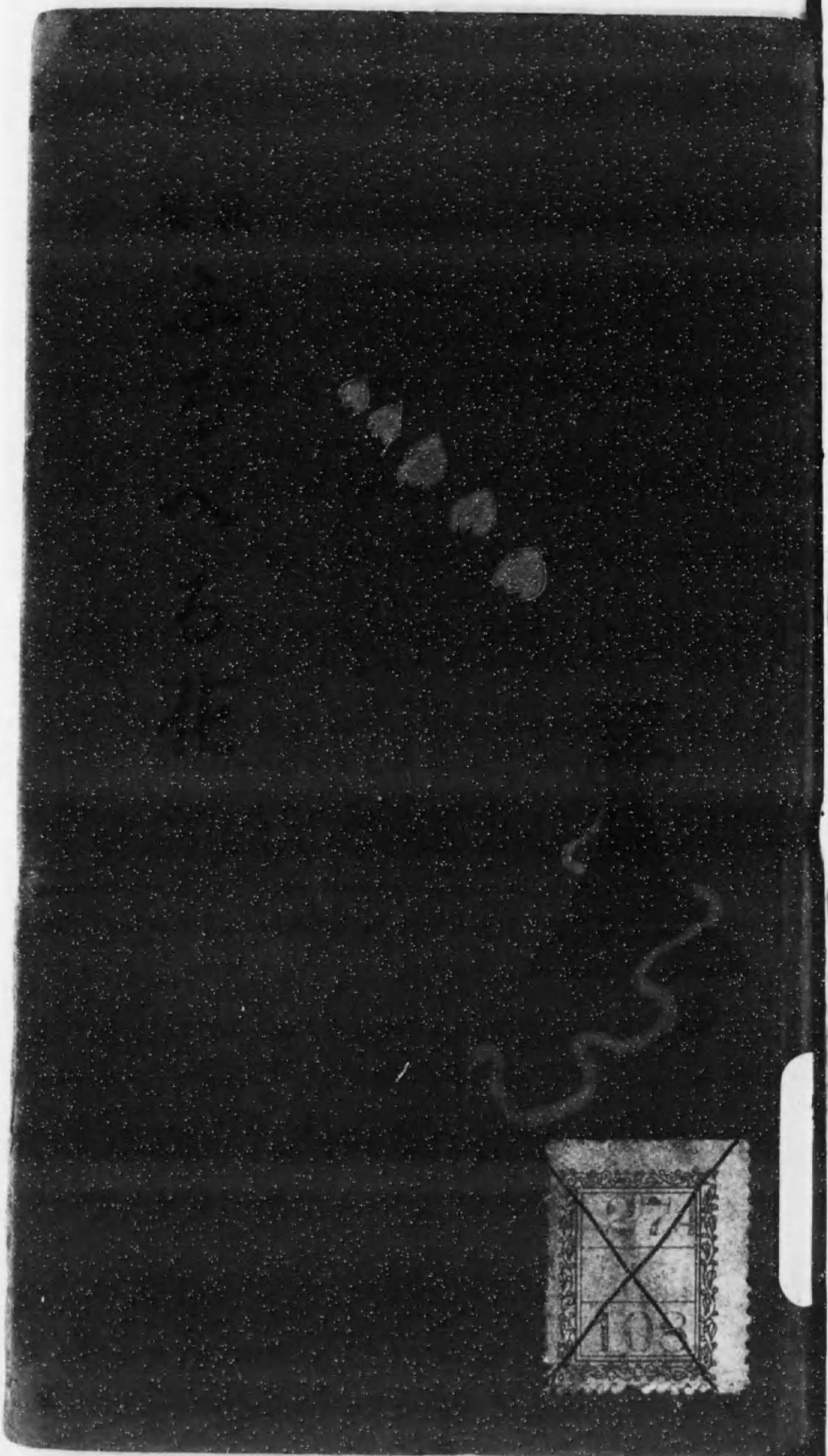


始



歌集

ふるへる花



特109

307



巻のはじめに

詩歌は心の片端である、然し又或時は女の酒であるといひたい。

私はあはれにも若き日を多く眼を病んだ。美しき瑠璃色の空は折々灰色に沈んだ。

だ。櫻の花のあやしく墨染に香るか。春を疑つた事もある。けれども若き血潮は躍

らずには居られなかつた。静に眠つては

1

大正  
2. 5. 20  
内交

居られなかつた。

悲しく惱ましく、やるせなき若き女の  
心！

私はこの幾年を詩歌の酒に酔うて心を  
なぐさめた。それより外に道がなかつた。  
かくしてあやふく若き身を徒らにはしな  
かつた。

この一卷は私の過去の歴史ではない、  
けれども一の哀史と見てもよろしい。而

も私の歌には矛盾が多い、それは若き女  
の貴い矛盾であるとなつかしむで居る。

私はここに二十五歳の春を迎へた。幾  
年を泣きぬたれ瞳も昨年頃から美しく輝  
く様になつた。

私はまだまだ哀へない、朝の鏡に髪を  
梳き、夕の鏡に白粉を怠らず、長き袂を  
春風に翻へして居る。

私はこれから新しき生涯に入るのであ

る。この復活に當つて今迄の歌を纏めて  
 紀念としたいと思ふ。

そこでいよいよ「第一歌集」ふるへる花」を  
 出す事にした。

終りに本書の爲に盡力して頂いた、與  
 謝野先生、岡本一平氏、岡村芳雨氏の厚  
 意を深く謝す。

大正二年四月

著者

目 次

紅	玉	紅
.....(1	.....(9	.....(1
.....93)	.....149)	.....203)
	ふるへる花	雨のしづく
	.....(9	.....(1
	.....149)	.....203)

欠



欠

3



三千はじめて  
我に驚く  
眼こそ開きたれ君に驚

君を見て直ただちにましと叫びたるかるはず  
みこそたふとかりけれ



戀すればうらはづかしさうら寒さ衣も  
かづかである心地かな

花草も低きながらに野をなしぬいざ君  
と我世をば開かん

ここにして眞玉の君を拾ふとはかの相  
人も及ばざりけん

をどりたる少女心は世の常に飽足らず  
とて火の口に来ぬ

古の少女のごとく夕されば人を戸にま  
つ習ひつくりぬ

たくみなる絃の音よりも君が来るたそ  
がれ時のあまき靴音

一人にてあるべきものを二人にぞなし  
給ひぬる神のたはむれ

み涙にわれぬれしより清淨の身となり  
にけん神も恐れず

たのまれぬおのが心と知りしより戀の  
 貴くなりにはけるかな

兄といひ夫つまと呼ばんもあぢきなし初戀  
 人のたふときものを

わがごとく君を思へる人ひとりよそに  
 あらぬも物足らぬかな

思へども逢はねばうしや君が戀はたわ  
 が戀と立ち別るらし

走り來しこの狂ほしさやるせなさと  
ひと突きに刺せと思ひぬ

大川の月を眺めてかへり行く君がうし  
ろに身を投げてまし

冬の夜のうす紫の寒き頬を吸はれしこ  
とのはづかしきかな

君思ふ心美しされどなほ身を清めんと  
涙す我は

われはしも雲に住まねどはしきやし天  
ゆく人を目近くぞ見る

戀といふ掟の外に掟なきわが世はもの  
の美しきかな

男らの知らぬ世界を知ることし少女が  
かづく黒髪の風

天地の美しきかな戀すれば古きころも  
を脱ぎ捨てしごと

またもなき力を君の持つものか我が天  
地の一切の上

君去れば星の消えゆき君来れば月の出  
づると時をはかりぬ

おもしろし少女がむれの袖ふれば疾はや風ち  
のごとき風の起りぬ

杯もいまだとらぬに見て早く少女は酔  
ひぬあはれなるかな

思はるる人とばかりに生甲斐のありと  
思はずいかかがしてまし

天地のはじめのことをふと思ふさ霧の  
中を君と歩めば

君が手にまかれし朝は黒髪たの尺も長たけ  
たる心地するかな

そのみ唇ふれたるものはもも色たにほ  
ふなるらんばらもわが頬も

つと立ちて白き牡丹をくづしけり物思  
ひせぬ花のにくさに

わが胸はくもりたれども君の來て常に  
遊べば歌の聞ゆる

この家は花をたやさず若きどちそのか  
げに居て美しき爲

面ぎぬは月にかけましわが君をとばり  
の外にへだてんは憂し



美しき言葉を人の貢ぐゆるる秋も心のを  
 どる少女子

歌ならでものいふことをゆるされぬ戀  
 の掟の美しきかな

とらんとて人争ひぬそのひまにわが家  
 桜枝多く咲く

風ならばみ袖吹かまし水ならばみ手す  
 すがましわれは何ぞや

見聞くものなべて美しみ心に傳へて後  
にわれにひびけば

いひまどひ思ひあまりしことどもを捨  
つるがごとく花の散るかな

少女子のをどる心の憎からば匂ふ花を  
もすべて葬れ

おのれをば知るとはあはれ咲き盡きて  
牡丹の花の落つるたぐひか

さかしらに掬するごと花さうびかたへ  
にとげをそなへたるかな

たゞ青くすめばみ空もあきたらず涙に  
濡れぬ心にも似て

わが涙ゆたかなる日はいとうれし戀の  
心にまじるものなし

天つ日の滅ぶ日あるに似てをかし句ふ  
少女の死を思ふとき

少女子は戀の香爐に身を投げておのれ  
よりこそかをらんとすれ

おのれのみ貴あきに匂ひてふと忘る梅も櫻  
もばらも小百合も

朝顔の開きつくすをかなしみぬ樂しき  
ことの果にひとしく

君を見て渴を覚えぬ紫に晴れ渡りたる  
わが心ゆゑ

ただひとり焔の中に遊ぶらんさびしき  
花にまじるひなげし

戀人は手さへ放たずものおちず同じ石  
にもつまづきてゆく

思ふ子は二人並びぬさはあれど同じ形  
にとけ合ひもせで

相ゆきて人の噂に入る時は少し心のを  
さまれるかな

まどかなることのみ云はで狂ほしく心  
を置きて物思ひせよ

少女あり人を思ひて病めりとは世に傳  
へても美しきかな

日をおかず君の來給ひよき言をみ聲も  
て聞く病たのもし

杯を見ればなつかしきころのよき片かた  
端はしをとり出でしごと

美しと君がながむるもの皆をあつめて  
われの心つくらん

み空ゆく人のけしきに似通ふといふみ  
やび男をいでやよく見む

みやび男の君と遊はばかたときに忘れ  
果つべき愁なるらし

美しき君と思へば頬を傳ふその涙さへ  
吸はまほしけれ

君あれば家内<sup>うち</sup>かがやき古びたる机も椅子も  
 香る呼吸<sup>いき</sup>つく

いねがたし君が門邊の青柳のよるの木  
 かげにいざ泣きて來む

心をばくまなく照らすみやび男とくら  
 べてぞ見るわが指の珠

わが前に帳をもたれずみやび男ともの  
 いふゆるにしづごころなし



君と寝てたわある髪を切るといふわが  
身の果か白百合の散る

かしましき人の國には家居せじ君がみ  
聲を聞きや洩らさん

わが耳のそこなひたるやなつかしきこ  
とのみ聞きて外を知らざり

罵られ石をうたれて街をゆく身の若き  
こそあやふかりけれ

わが戀に人のねたみのかかれるも花の  
影する水に似てよし

この夕み空の人に抱かれて身にあまる  
ごところほろぎを聞く

わが肩に何を泣くやと大川のそそぐが  
ごときみ手を給ひぬ

秋風もこの少女には戀人の氣まぐれほ  
どのをかしさに聞く

いちはやくつばさを捕りてしら鳥をか  
へさぬてだてわれもおぼえん

わが心ととのはぬ間に來給へば戸に立  
たせたる君のなげきぬ

なべて世をうつくしく見し鏡をばそこ  
なひにけり君につまづき

み手をさへとれどもいまだ君とわれ近  
づきしとはおぼえざるかな

命をも捧げしことがあやまちか君を得  
 たるがわれの不覺か

あやまちのおもしろきかな黄金の香爐  
 の中におち入りぬわれ

白玉はいつく臺うてなの小さければ青海原に  
 かへらんと云ふ

この少女つばさを持ってば土にのみおり  
 居ゐることのあきたらぬかな

くちびるを君に任せてありしかばわが  
心をも吸ひ給ひけん

おとなしく君をまつごとこの夕しをれ  
ぬ花のうとましきかな

おもしろし君が椅子こそ倒れたれいざ  
わが方に膝を並べん

わがかづく赤き衣を世の人は焔と見て  
やうちさわぐらん

君によりわが聞くことのあるごとしあ  
はれいく世の後に聞くらん

わだつみの船人はよし戀人の心の上を  
遊ぶたぐひか

少しくは男に習ひ云ふことをつつしむ  
べきかわが戀の爲

いと弱き少女とわれを世に生みし償<sup>つぐな</sup>ひ  
として人を戀しめ

君おもふこと心なし忘れ得ずかくよき  
 聲をあまた聞くかな

木下蔭君と泣きつるおもひ出のよけれ  
 ば濡れぬ朝のしづくに

妹が衣ぬふ時に文を書くわれや少しく  
 あやまてるらん

君により高き光を見つるより涙ながれ  
 てとどまらぬかな

いかばかりうつし心を無くしけん落つ  
る花にもわれはつまづく

その日より指のしびれぬ摘みけるは毒  
もつ花のたぐひなりけん

まだ少し泣き足らぬらし次の世も戀し  
き人とまた泣きに来む

戀人はくらきかげのみ歩むべく掟てら  
れたるものならなくに



この君の氣まぐれもよし夕ぐれの花を  
そよがす風のごとくに

日くれぬと悲しげにいふ夜の空に月あ  
ることを知らぬやからは

花をみな黒きものぞと見給へるあやし  
き眼鏡捨てて来たまへ

をかしきはやくざ男も戀すれば白足袋  
はきぬ春の夕ぐれ

目の盲ひてはた耳しひてあらばかもこの  
 天地にあやまち無けん

ああ人を思ふばかりに生れ來しわれぞ  
 と世をも忘れたるかな

後の世も女となりて君思ふ足らぬここ  
 ろを補ひに來ん

うちつけにわが悪口をよくいひて笑ふ  
 君なりそれを好みぬ

うれしくも少女となりし身をたのみ落  
つる日をさへ招かんとする

山吹の花折ることをわれ知らず小雨に  
ぬれし人に宿かす

穀<sup>こ</sup>断<sup>だん</sup>の山法師より戀の實を食まざる子  
等の衰へを見よ

わが名をばつけたる父をたたへまし柱<sup>ち</sup>  
をおかすしてたゆむ琴かな

玉二つ並ぶにひとし思ふこと似る人と  
人同じ世ながら

捨てゆきし煙草のからも何となく心と  
がめて泣かれぬる朝

はらはらとあられのごとくふり來る涙  
の下に寝給ひし君

わが知らぬおほかた人も通り魔も誰も  
引けとて長き袖かは

たまさかのこのなまぬるきくちづけを  
あはれ貴くめでたしとする

美しく泣きくづをるる時ばかり君が心  
の少し傾く

さはれ君淋しからずや初秋となりて少  
女の泣かぬ夕ぐれ

思ひ出て人の前をものはばからぬ涙のご  
とき春の雨かな

わりなくも男の世をば見んとしぬ心を  
 さなき少女なれども

はかなしと思ひ來れば君さへも戀のあ  
 るじといふに過ぎぬか

花咲くも木の葉の散るもこのごろは戀  
 にかかはる君にかかはる

行き暮れて宿り合ひたる人のごと虫な  
 く家にわび寢をぞする

男よりののがれてわれはいづちゆく白き  
素足に石を踏みつつ

紫に紅あかにみどりに數多く帷とほり垂れまし悔  
のぞけば

いたましく残る夜明の灯に似たり君が  
かたへにおかれたるわれ

み心はあまり美しいかにせんみだれて  
われの泣く陰もなし

いづこともわかぬかげにて虫なきぬも  
 のわぶる身のわれに似るらん

初秋に君が文来て誘ひたるこの涙こそ  
 おのが露なれ

よき言をいはすともよしためらはすに  
 くきことをばいひに來給へ

ひとり居て恨は盡きぬ相見てはよきこ  
 と多く物語らまし



この人はおろかなるかな恨む時おのが  
心に石つぶてする

別れてぞ君がみ心とかましとさかしま  
ごとを企てしかな

かの男憎き敵かたきと思ふより人のとれるも  
口惜しきかな

あちきなく指に泥ひぢしぬ白百合の折れて  
伏すをばなげくあまりに

海のごと涙湧く身とし給へばをどれる  
魚の心となりぬ

白玉もあたひなかりき算盤そろばんと時計の中  
におかれたる時

この日ごろ甘き涙をほしがりぬ雨待つ  
草を心にはして

うつくしき涙はれたるわが胸に虹のご  
と燃ゆ新らしき歌

いみじくも人をねたみしとがゆるゑに醜  
きものとあやまたるらん

わが戀の止まばとこしへ雨雲よ空をお  
ほひて喪のごとくあれ

かはりゆく旅の心地に君と居てひと日  
ひと日に心おどろく

はしたなく忍びてゆかすうつくしき戀  
ゆるわれは世をばおそるる

わが爲に世を見る鏡とりて來し君ぞと  
思ひ惜くしもなし

そしる子もねたむ子もよし事なくばさ  
びしからまし二人ありとも

ひとり居て物を思へばうらがなし願た  
んとして得たる君かな

少女子はをろかなるかなみづからを人  
にささげて得るところなし

すなほなる鳩の心のかたはらに鶯の心  
もそなへけるかな

美しとわが心をばはやさるる聲のみ聞  
きて君を忘れぬ

相見るはうらみむ爲かいとほしと手と  
らん爲か君に先づ問ふ

別れては知らぬ人とも見て行かず敵かたきの  
ごとくよけて通りぬ

君の來て手をとりに給ふ時ばかり脈うつ  
ならんあはれなきがら

飽きたるかはた忘れしか皆あらずわれ  
らの戀の終りたるらん

くらやみの寒き夜路もあかつきの雲に  
つづけりさはななげきそ

にくき事をも聞く日はなほやすし君  
がもだしをいかにかはせん

われもただ人並といふいたましき少女  
なるらし君に捨てらる

こころよく君とわかれぬわが道をふた  
げるものを除くがごとく

双手もて花をつむてふいとまなき人あ  
はれなり春の暮れゆく

戀すてふいみじき歌をただひとりもて  
はやすなり君によしなし

黒髪を誰にささげん長けゆかば集へる  
子らにすそをとらせん

この思ことごと君にささげ果て身のか  
ろがろとならば別れん

大地ちがひを踏むとも見えす幾とせはあやう  
き君が國に遊びき

黒髪にはたや衣に香焚かんにほふ心は  
人の知らねば



みやび男はこころをあまた持つと聞く  
 少女子われも諸向もろむかひにせん

清げにも高くかをれど灰色の醜みにくき花を  
 われいかにせん

相むかひ恨みむものと事たくみ心の火  
 をばかりに來し君

うつくしき君が指さしゆびは一つづつ異なる花を  
 思ふらんかも

相見む日ともに飲むべき杯は死ぬる薬  
を罇つぼに盛れ

高光る日を負はんとてたもとほり泣く  
大鳥のあはれなるかな

かたはらに君こころよく泣かん日もわ  
が笑まん日も常久に無し

君の頬の涙のあとを拭ひしは忘れ給へ  
といひしにも似る

かなしきは白くかよわきただむきにふ  
れなばささんどげもたぬこと

君が眼もはたくちづけも物足らず毒も  
つ蛇にいのち吸はせん

かよわくも泣くべきものと言はれたる  
その女にぞたかはすて在る

さかしまに君よりわれを死ぬばかり戀  
せられなばいかにしてまし

みづからを小さくするにもひとしかる誓かた  
 言ことしたりありのすさびに

すぐれても強きものからおそろしき獸  
 のごとも見ゆる男よ

文ばかり書き交すをば若き日のいみじ  
 き事にかぞへんに憂し

わが戀は死に到りつく近道を早くえら  
 びてゆくに似しかな

さし櫛を折るよりやすく親達のいさむ  
るままにあきらめしかな

君のゆくうしろ姿かわが墓のさむきお  
もてか胸に映るは

月よしと人の語れば毒の降る夜ともお  
それぬ思出の爲

なつかしきみとり出でたるは戀の文いな  
いなわれを吊へる文

欠

# 欠

とこしへに戀人としてわれあらむ二人  
三人と争ふもよし

この玉はたえずまろびてありかをば定  
めず人のとるよしもなし

おぼえけり甲斐なきものに云ひなして  
男の前に身を投ぐるごと

先づ酔ひて先づ眩めまひしぬその後には知ら  
ぬ少女と君とありけん

折々は君を忘れてひたすらに戀を戀す  
る心おこりぬ

しめやかに人と泣きしを忘れかね似た  
る戀をばつくらんとする



七日ほど心をせめて泣きしかど悔ゆる  
 ことなしなほ人を見ん

たのむべき君と思へどたのまれぬわれ  
 ぞと知りて身の寒きかな

幾人のよその少女を語るとも妻となる  
 身はほこりかに聞く

火の中に遊べるをのみ女ぞとわれかぎ  
 らましみづからの爲

若き日に見ればなつかし獅子の子も無  
頼の友も死ぬる薬も

なふれそと賢くいはずわが花はとりて  
限なく見よと思ひぬ

死なんなどたやすくいへど黒髪を切る  
とはいまだ誓はでありぬ

五月雨はしとしとふりぬおもしろく女  
の涙つきずとも見ん

掟てふいみじきことを知らぬゆゑわれ  
は常にものどかなるかな

物古りし道をたどるはあぢきなしおの  
れ開きて人を誘はん

おどけたる男心の見えしより泣かぬわ  
れともなりにけるかな

男をば憎し憎しと思ふより夜の白粉も  
怠らぬわれ

われいまだ男心を見すかさずはかられ  
ぬこそいとうれしけれ

君遠く道を開けりわれ深く穴をうがつ  
もをかしからずや

大方の涙をわれは覚えけりいまはまど  
はじ七人を見て

弟としてこそ抱け戀人といはんもあま  
りやはらかき君

導きぬやるせなげなる少年を黒髪の世界  
 に渾沌の世に

この胸のいと廣やかに果てなきをわが  
 少年はまどひつつ泣く

わが毒を君の吸ひけんしみじみと泣く  
 少年となり給ふかな

毒の蛇身をかむごとしはげしかるわが  
 少年の晝のくちづけ

ほがらかに相向へどもしめやかにわが  
泣く夜半を知らぬ戀人

開きわけのあらぬ君こそうれしけれ我  
を泣かしめわれを悔いしめ

草花の小さをとりてほろほろと涙こぼ  
せる少年もよし

むつかしき謎負はされてかへりゆくわ  
が少年のあはれいたまし

もとすゑのあらぬ戀こそうれしけれ旅  
にて旅の人思はばや

すなほなる女となりぬ別れんといへば  
すなほに別れ來るまで

泣かれけりわがくちづけに足るごとく  
ことやすげにも君の云ふ時

ダアリアはふるへてありぬ戀人を殺さ  
んといふ夢のかたはら

爪弾きの三味のやうにも雨ふれば捨て  
たる人もうら悲しけれ

涙来てわが心をば洗ふ時残る男のなき  
もさびしき

人の上に涙そそがすわが泣ける涙に人  
ぞ来ておぼれける

誰かきて更に酒をばふくませよ火もな  
ほ涼し心若さに



思出のうつくしさよりはた彼をゆるす  
心となりにけるかな

ひと言を別れにのぞみわれいはん戀に  
かりたる君なりしとぞ

ふと思ふ心のままにうちまかす旅の男  
の淡あはしなつかし

さきのこととはた後のこと問はずいはす  
女とばかり見てとり給へ

ふと思ひふと盗みゆくあさはかもいと  
 まあらぬがうれしきものぞ

美しき戀の昨日は頼むべき曆の明日に  
 少しまさらん

別れんと思ひ立ちつつ漸くに君の戀し  
 くなりけるかな

七人の男を敵と知らん時はじめてよよ  
 とわれや泣かまし

いとかるき心のひまの戀にさへ男ひとり  
りを抱くものかな

すやすやと眠れる君をふとおそる知らぬ  
男とある心地して

あざやかに昨日と今日と變りゆく心の  
ままの戀をしてまし

戀すれどいまだ君をばたのますと云は  
ば怒りて別れ給ふや

黒髪をうつくしと見るおろかしき男の  
戀も稀にたのもし

花となり見知る男のかたはらにいと心  
地よくちらまじものを

蝙蝠かろうの黒き姿も見ればよしわが變心の  
影に似たれば

糸切れて風船の去る心地よさわがかの  
戀をかへり見ぬより

われいひぬ君はまたなき情なきけ知り折にふ  
れたる戀を語らん

氣まぐれの君が心のさまよひにふるる  
女を思ひやるかな

わびしやとなげく男に別れけり若き心  
を傷つくるゆる

心多き人といふこそをかしけれうつら  
の胸と入るに任せば

美しき男に來よといふごとく雨にかた  
ぶきひなげしの咲く

摘む花を敷ふるごときをさなさはわが  
このごろの戀に思むこと

俄雨小傘持たぬを驚くに似しか昨日の  
戀の心は

空涙それもこの頬を流れたるものと思  
へばにくからぬかな

この戀も二人がよりてなげくことなほ  
つきぬ間に暮となれかし

うしろより思出の火にてらされて行手  
の闇を知らであるかな

かたはらに泉の少女來てまろぶ君こそ  
世にも寒くおはさめ

かの君は袖の中にも入れてましなほこ  
の君は胸に抱かまし

旅にする氣まぐれごとの如くにも男は  
云ひぬ惜しき別れと

こころよき君が恨にうすがすみ身をま  
くごとく春の日は來ぬ

櫻花はらはらちれば覚えある罪を問は  
るる心地こそすれ

少女子はあやふき時も黒髪をたのみて  
ありぬ魔法のごとく



ちりてなほ水に遊べる花のごと古りた  
る戀も世に捨てじわれ

おのれをば少しはなれて見ることをい  
まだ知らぬをめでたしとする

おもしろきつづきものなど聞くごとく  
明日あした明日あしたの誓言かひことを待つ

みやび男は聞きのとよき名なりけり  
君と見つるもそのほどのこと

返ししぬ我より少しすぐれたる偽ごと  
もいひ給へなど

懺悔とはみ山の石に祠立てわれをまつ  
るに似てかなしけれ

恨むとは思へる仲にいふべきをものお  
ちなせそおとなしき人

その名いと美しければわが爲に用ある  
時は戀といはまし

男をばみ空のごとく仰ぎたる昨日の我  
 とことなれるかな

おとろへて櫛にかかりし黒髪の捨てわ  
 びたるを男にぞやる

思出もたまたまうれしまだ知らぬいみ  
 じきわれを見出でたるごと

ゆくりなく人を泣かせしあやまちに蛇  
 の女とうたはるる身ぞ

この憎き蛇の女をさいなむといふ君な  
きがうらさびしけれ

どこやらで歌はれるよな心地して柳の  
かげに細細とまつ

心中の話なかばにふりそそぐ障子の外  
の雨をきくわれ

門口に清十郎や迷ふらん出でて逢はま  
し連れて逃げまし

抱かれて正體もなき美しさ舞に疲れて  
戀に疲れて

うそぶける君が心の憎らしさ唇よりも  
酒をあびせん

一夜妻一夜なるこそうれしけれ知らぬ  
男ぞ寒き男ぞ

浮名立つ知らぬ男と浮名立つ春の軒端  
に吹く風のごと

戀ざめのこの心よさ新らしき男にうつ  
るこのころよさ

捨てたりし男が少し恨む日か二尺に足  
らぬ袖の重たき

心中か戀わづらひかその外にわが死ぬ  
すべはあらじと思へる

心中の夢ばかり見る少女子を君の戀ふ  
とやあやふしあやふし

君をもて世の大方の男をごころを知ると  
はいまだいひがたきかな

後姿うしろすがたのうら寒げなる男をばあはれむ心  
うすらぎにけり

七人を思へる君と聞きしより遊ぶ心と  
なりにけるかな

浅草の少年のごとわが前にとんぼがへ  
りをする男見ゆ

弟が裏の林に口笛くちぶえを吹く夕ぐれのなや  
ましさかな

裏町を君とゆく時いと軽き草履の音を  
忍びゆく時

別れんといふ日も君はおもむろに眼鏡  
のちりを拭ひ給へる

あな惜し惜しといへるよき聲を夢につ  
づけて空寝して聞く



ビストルをふところにして來給ひしそ  
の夕べより夢のよろしき

娘いふああ父母よわれをしてまことの  
人の世におき給へ

歌もなきかたは娘とわがならばわが父  
母よかなしからずや

事悔ゆるまでにおのれをおとろへしも  
のとはいまだ思ひ得ぬかな



■のしぐさ





世の少女

世の少女茜の雲となるときもかくれて  
なげく黒雲ぞわれ

世

力ある聲を聞かましわれ呼ばん石にも  
しばし名の欲しきかな

いづこより拾はれて來しわれなると時  
 にあやしむおのが家さへ  
 恨をば誰にうけたる落髪ぞみ空に投げ  
 ん雨雪となれ

舞ごろも縫ひつるばかり舞ひもせで人  
 にかづくる日となりしかな

母といふ大なる手に抱かれて人に與へ  
 ぬおのがつばさは

白百合は氣遠ヒになりぬ  
 二三人白粉やけ  
 の手のふれし時

いと寒き少女のわれのふむところ青き  
 草さへ枯れて伏すらん

うち見には平かなれど地の底に踏み入  
 るごとき砂の音かな

灰色の地をのみ歩むそれもまたわびし  
 き事のひとつならずや

おのれより遠ざかるごと人の世のくらし  
 き陰のみ見てありくわれ

妹等花と遊べどわれひとり狂へる風を  
 追はんとぞする

あらしの日たまく おのが故郷に來れ  
 るごとく心なごみぬ

髪断ちて身をのろはんと企てぬ父母い  
 かでわれを撲たぬか

静なる流れに倦みて山川も渦巻く海に  
入るごときかな

父母の子といふことも忘れたるこのね  
ちけ人生くや何時まで

夜となれば床の中にて忍びなくかなし  
き癖のつきそめしかな

黒髪と白きかひなとなげきけりさびし  
き君にいかが仕へん

花に来て蜂を見しごとわが胸の暗きに  
人のおどろきて逃ぐ

憂けれども無くばことかく衣のごとお  
のが心は保つべきかな

日輪も時には黒き雨雲の出でて遊ぶを  
ゆるし給へば

琴の身は愛でて弾かれずあそばれて泣  
くものところを思ひ知りけれ



この琴は清く澄みたる音をたてずかき  
裂くごとく荒れて鳴るかな

弾く人の指のままには音をたてずおの  
れより泣くおもしろき琴

女狩るさつをの群も見残しぬ土の室<sup>むろ</sup>屋<sup>や</sup>  
に涙する子を

わが聞くはみ寺の鐘のたぐひかな心を  
どるといふ調べなし

わが心土に捨てられ秋風にもてあそば  
れてゆくところなし

いと重きものを負ひたるわづらひをお  
ぼえそめけりわが心さへ

あはれてふものにかぞへて遠人よわれ  
をもしのべ秋の風吹く

秋くれば心すこしくなごむかな世のも  
のなべてしをれぬは無し

春の風はた秋風のけぢめなく同じ形に  
 なびくわが袖  
 平なる道ばかりこそわれはゆけ山はま  
 ろばん海はおぼれん

荒れ狂ふ風にも乗らんありわぶるわが  
 心こそかなしかりけれ

鶯の來鳴けば春と云ふ如きけぢめを知  
 らぬわが心かな

わが家のかたぶきゆくを軒に立ち惜む  
 心に吾をなげきぬ  
 羽をもつ世の少女より地の上を這へる  
 われこそ安らかに居れ

わが心世をも咀ふを少女子とやさしき  
 名もて呼ばれたるかな

雨ふればもののあはれをしみじみと思  
 ひつづくや白百合の花

わが心少しは人につれなかれかく思ひ  
つつ秋風を吸ふ

黒雲は心地よきかな怒る時日さへおほ  
ひてはばかりすす行く

泣きくづれ筋なき事にとり亂す女のご  
とくちる櫻かな

よしと見てわれは止る人は皆終はてに急ぎ  
ぬ悔に急ぎぬ

世の常と物をあさくもあきらむるかし  
こき心ありてさびしき

何ものもよけて通るがうれしさにわが  
住む家は灰色に塗る

とこしへに明日來んといふ幸に欺かれ  
つつ生くる人われ

かなしくも物のことわり知りそめてお  
のれの外に恨むべきなし

疖症の伯母の煙管の折れたるをふと思  
ひ出づ秋の來ぬれば

あはれにも袋に在りて歌しらぬ琴のご  
ときかひとり寝るわ<sup>れ</sup>

いと淺く耳にばかりぞひびきするわが  
世の事のあはれさびしき

わが花はさかりとなりてなつかしき句  
ひは立てず毒をしぶきぬ

墨染の花にもあらず物思ふわが黒髪は  
喪のごときかな

あさましき掟をおかぬ心地よき詩の國  
にのみはばからず生く

掟なく王なき國にあるごとく一人ある  
よりあやふきはなし

しろがねの瓶びんにおかるる日を知らず菰  
の中にも寝たる花かな



人なみにはれやかなれと初春はせめて  
衣を新しくする

うれしくも人の心の大らかに空のごと  
きを元朝に見る

腕白の弟こそはうれしけれこのあさま  
しきわれをよく打つ

人は皆花をかざしぬわれ一人枯草を引  
く野の遊びかな

恨むべき大なるものあらざればただみ  
づからの挽ひき歌うたをよむ

かにかくにわが力ぞと思ふかな今日も  
めでたく涙ながるる

われに火のせまると聞きて漸くに起た  
んと思ふ心おこりぬ

わが涙は何ごとぞ屋根裏の雨のしづ  
くに似たるみにくさ

にほやかに涙こぼれて泣く時の美しければせめてなぐさむ

十年ほど泣きぬれてあるいたましき瞳が見たる春の色かな

夜を早くせんかたなさにわが寝れば壁を隔てて父母の泣く

わがよれば高き櫻の花ちりぬのけものにして走るごとくに

黒雲となりて怒らず灰色となりて沈める  
空はわが空

死をよしと口にする時みづからを欺く  
ことの大なるかな

うら寒きされかうべのみ目に浮ぶ静に  
われを見んとする時

男をば知ると知らぬとわが上に小さく  
となり深く思はず